

中島敦『弟子』における子路像

——『論語』由之鼓瑟章、『孔子家語』子路鼓琴章との比較を通して——

荒 木 雪 葉*

はじめに

春秋時代の中国に生き、孔子の弟子として知られている仲由（字は子路）は、中島敦『弟子』に主人公として登場し、作品中には子路が孔子と出会った時点からその死までが描かれている。ところで史実としての子路像を知るには『論語』『礼記』『左伝』『史記』、また『韓詩外伝』『孔子家語』といった書物に依ることができる。この中で、『論語』と『孔子家語』とにおける子路像は大きく異なっている。中島敦『弟子』における子路像、特に子路の楽器の演奏を孔子が批判するというエピソードについては、中島敦は『孔子家語』を参照したものであると思われる。そこで本報告では当該エピソードに注目して、『弟子』における子路像を明らかにする。

中島敦『弟子』に関する先行研究は数多くあるが、中でも中国古典や思想との比較を詳細に行うものを挙げると、以下のとおりである。

佐々木充氏『中島敦の文学』（桜風社、昭和 48 年）は、『孔子家語』『説苑』『史記』などの中で『弟子』に引用された部分と『弟子』に書かれた部分とを詳細に比較して、『弟子』においては「人間の「生」と「死」を描くこと、「真実の生と

* 福岡大学教育開発支援機構共通教育研究センター外国語講師

は何か」を追求すること、そこに作者のテーマがある」(323 ページ)とする。また子路の生き様を「明哲の師孔子を字義通りの範型として追隨するのではなく、それをおのれに課された優れた粹とし、それに対してあえておのれの異をたて続けたとき、子路の生は、その独自の個性の光芒を夜空に曳いて流れた」(328 ページ)としたうえで、このような子路を「中島の理性が希求した一つのあらまほしき像」(328 ページ)だと指摘している。

李俄憲氏は「中島敦『弟子』とその典拠」(新潟大学大学院現代社会文化研究科『現代社会文化研究』第15号、1999年9月)において、『弟子』の資料として用いられた資料と『弟子』との比較をして、『弟子』への原典の取捨選択具合から分析を行っている。この論文では本稿と同じ『孔子家語』の弁楽解篇を取り上げているが、中島敦が、子路が孔子の批判を受けて反省をしたあとに再び瑟の練習をしたことと、孔子が何も言わなかったことに対して子路が笑った場面を補ったことについて「この書き換えによって『孔子家語』の師弟関係と『弟子』のそれとが異質的なものになってしまっている」(201 ページ)と指摘するにとどまっている。本稿では、この書き換えについてさらに深く探求する。

李俄憲氏「「一片の冰心を待む」——中島敦『弟子』における子路の形成——」(新潟大学大学院現代社会文化研究科『現代社会文化研究』第16号、1999年12月)には、『弟子』の子路の形象を『論語』と『史記』遊俠列伝の二書と比較することで、『弟子』の中で子路の形象が遊俠の徒から「己を抑え、師の教えを積極的に受け、死ぬまでに師に己を融合させようと懸命に努力する主人公子路」(310 ページ)へ変化するさまが浮かび上がってくると述べられている。

また孫樹林氏は『中島敦と中国思想——その求道意識を軸に——』(桐文社、2011年)において、中島敦が『弟子』執筆時に取捨選択した中国古典の素材から「「仁者」に至らなかった「義侠」の子路を浮き彫りにしようとした」(305 ページ)と推測する。そして儒教における「義」「仁」「中庸」の思想に着目し、

求道者たる子路の悲壮な運命を通して「小と個の「義」に固執すれば大と全の「仁」と「中庸」が体得でないこと、つまり自我に固執しては自己救済の道を自ずと塞ぐことになる」(307 ページ) ことを証明できたと述べている。

筆者は『弟子』の子路像を分析するにあたり、楽器の演奏という新たな点に着目した。筆者は以前博士論文において、『論語』の中の子路が瑟を鼓するエピソードを分析したが、そこから見える子路像は、中島敦の『弟子』中で、瑟の音が「北声」であると批評されている子路像とは異なるものであった。

また子路が瑟を演奏して孔子に諫められるエピソードは『孔子家語』にも見られる。『孔子家語』の子路像は『弟子』の子路像とはほぼ一致している。そこで『弟子』『論語』『孔子家語』それぞれの子路像を明確にし、相比較して、中島敦『弟子』の子路像を明確にする。

1. 中島敦『弟子』の子路

まず中島敦『弟子』における子路像を明確にする。以下、() 内の「一」などの漢数字は、本文の章立てによる。またページ数は中島敦全集による。引用文中の下線は筆者による。一重下線は子路について、二重下線は孔子の子路に対する気持ちなどである。また傍点は原文に基づく。

・荒々しい性格

『弟子』において、子路は登場の時点で既に荒々しい正確であることが描かれる。他の二か所の引用とともに見てみる。

- (1) 魯の卞の游侠の徒、仲由、字は子路といふ者が、近頃賢者の噂も高い學匠・陋人孔丘を辱めて呉れようものと思ひ立つた。似而非賢者何程のこと

やあらんと、蓬頭突鬢・垂冠・短後の衣といふ服装で、左手に雄鶏、右手に牡豚を引提げ、勢猛に、孔丘が家を指して出掛ける。鶏を揺り豚を奮い、嗷しい腎吻の音を以て、儒家の絃歌講誦の聲を擾さうといふのである。(中略)「汝、何をか好む？」と孔子が聞く。「我、長劍を好む。」と青年は昂然として言ひ放つ。

(一、465 ページ)

(かつての友人の、孔子を馬鹿にするような「心安立てからのいつもの毒舌」に対して)

- (2) 子路は顔色を變へた。いきなり其の男の胸倉を掴み、右手の拳をしたたか横面に飛ばした。二つ三つ續け様に喰はしてから手を離すと、相手は意氣地なく倒れた。呆氣に取られてゐる他の連中に向つても子路は挑戰的な眼を向けたが、子路の剛勇を知る彼らは向つて來ようとしない。

(三、470 ページ)

(費城を取り壊すことに反抗した公山不狃の反乱に際して)

- (3) 孔子の政治家としての手腕はよく知つてゐるし、又その個人的な臂力の強さも知つてはゐたが、實際の戦闘に際して之程の鮮やかな指揮ぶりを見せようとは思ひがけなかつたのである。勿論、子路自身も此の時は眞先に立って奮ひ戦つた。久しぶりに揮ふ長劍の味も、まんざら棄てたものではない。兎に角、經書の字句をほじくつたり古禮を習うたりするよりも、粗い現実の面と取組み合つて生きて行く方が、此の男の性に合つてゐるやうである。

(六、476 ～ 477 ページ)

物語の序盤、子路は「長劍を好」み、また自分の師を馬鹿にする発言をした友人に暴力をふるう。また引用 (3) では、書物を学ぶことよりも長劍を取っ

で戦うことのほうが性に合っていると述べられる。ここで子路の荒々しい性格が印象付けられる。

・まっすぐな気質（「大きな子供」）

子路はただ乱暴な人物とされているわけではない。曲がったことが大嫌いな、真っ直ぐな人物として描かれている。

（衛の靈公の夫人南子に孔子が謁見した後、子路は面白くなく、露骨にいやな顔をした。）

(4) 絶対清浄である筈の夫子が汚らしい淫女に頭を下げたといふだけで既に面白くない。美玉を愛蔵する者が其の珠の表面に不浄なるものの影の映るのさへ避けたい類なのであらう。孔子は又、子路の中の相当敏腕な實際家と隣り合つて住んでゐる大きな子供が、いつまでたってもいっこう老成しそうなものを見て、おかしくもあり困りもするのである。

（九、483 ページ）

ここでは、清浄であるべき孔子が南子に会うだけで子路の機嫌は悪くなるのである。その子路のまっすぐさは、作品中では「大きな子供」と表現されている。

・敏腕な政治家

子路は敏腕政治家としての一面も持っていた。魯国の家老の一つである季氏の家宰を務めたこともあり、また将来命を落とすことになる衛国で、衛国の家老である孔家のためにも仕えた。

（子路が衛の正卿孔叔圉の宰となり、蒲の地を治めて三年、孔子がたまたま蒲を通った。まだ子路に会う前に子路を褒めたことについて子貢が尋ねた。これに対して）

(5) 已に其の領域に入れば田疇悉く治まり草萊甚だ辟け溝洫は深く整つてみ

る。治者恭敬にして信なるが故に、民その力を盡くしたからである。其の邑に入れば民家の牆屋は完備し樹木は繁茂してゐる。治者忠信にして寛なるが故に、民その營を^{ゆるが}忽せにしないからである。さて愈々その庭に至れば甚だ清閑で従者僕僮一人として命に違ふ者が無い。治者の言、明察にして斷なるが故に、其の政が^{みだ}紊れないからである。未だ由を見ずして悉く其の政を知った譯ではないかと。

(十四、495 ページ)

引用 (5) では、孔子が子路の政治家としての才能を、子路の「恭敬にして信」「忠信にして寛」「明察にして斷」という性質によるものと褒めている。荒々しい、また真っ直ぐな性格というだけではない、充分に大人らしい面を持つ子路像が描かれる。

・天に対する疑問

次に挙げる引用部分では、天に対する疑問が語られている。天に対する疑問は『論語』や『孔子家語』には無く、『弟子』にしか見られない部分である。

- (6) 大きな疑問が一つある。子供の時からの疑問なのだが、成人になつても老人になりかかつて未だに納得できないことに變りはない。それは、誰もが一向に怪しもうとしない事柄だ。邪が榮えて正が虐げられるといふ・ありきたりの事実に就いてである。(中略) 大きな子供・子路にとつて、之ばかりは幾ら憤慨しても憤慨し足りないのだ。彼は地團駄を踏む思ひで、天とは何だと考へる。天は何を見てゐるのだ。其の様な運命を作り上げるのが天なら、自分は天に反抗しないではゐられない。天は人間と獣との間に區別を設けないと同じく、善と悪との間にも差別を立てないのか。正とか邪とかは畢竟人間の間だけの假の取決にすぎないのか？(中略) 善をな

すことの報いは、では結局、善をなしたといふ満足の外には無いのか？
(中略) 誰が見ても文句の無い・はつきりした形の善報が義人の上に来る
のでなくては、どうしても面白くないのである。
天についての此の不満を、彼は何よりも師の運命に就いて感じる。

(七、478～479 ページ)

『弟子』において、子路は天に対して、特に師の孔子の運命に対して疑問に思う。この部分は本稿に直接関係はしていないが、中島敦の作品を考えると重要な点であるため言及しておいた。

・孔子との違い

さて、引用（6）にも見られるように孔子を義人と見定め、引用（2）のように師のために友人にすら手をあげるほどの子路であるが、その孔子に対してさえどうしても譲れない部分がある。それを語る以下の箇所も、『弟子』オリジナルの部分である。

- (7) だが、之程の師にも尚觸れることを許さぬ胸中の奥所^{おうしょ}がある。此處ばかりは譲れないといふぎりぎり結著のところだ。 即ち、子路にとつて、此の世に一つの大事なものがある。其のものの前には死生も論ずるに足りず、況んや、區々たる利害の如き、問題にはならない。俠といへば稍ゝ輕すぎる。信といひ義といふと、どうも道學者流で自由な躍動の氣に欠ける憾みがある。そんな名前はどうでもいい。子路にとつて、それは快感の一種の様なものである。兎に角、その感じられるものが善きことであり、その伴はないものが悪しきことだ。極めてはつきりしてゐて、未だ嘗てこれに疑を感じたことがない。

(五、474 ページ)

ここで「ぎりぎり結著のところ」「未だ嘗て疑を感じたことがない」「此の世に一つの大事なもの」という語で表現されていることがらによって、のちに子路は命を落とすことになるのである。それは次の引用にも見られるように、子路にとってはおのれの身を守ることよりも大切なものである。

(陳の靈公が臣下の妻と通じその女の肌着を身につけて朝に立ち、それを見せびらかしたとき、泄冶という臣が諫めて、殺された。また殷の紂王を諫めた比干も殺された。この二件に対し孔子は、比干は紂王の血縁であり、立場も諫めるだけのものであり、己の身を捨てて諫めて、殺された後に紂王の悔悟するのを期待した。これは仁である。これに対して泄冶は肉親でもなく、一大夫に過ぎなかった。君正しからず一国正しからずと知らば、潔く身を退くべきに、身のほどをも計らず、区々たる一身をもって一国の淫婦を正そうとした。自らむだに生命を捐てたものだ。仁どころの騒ぎではないと評した。これに対して)

- (8) 結局此の世で最も大切なことは、一身の安全を計ることに在るのか？ 身を捨てて義を成すことの中にはないのであらうか？ 一人の人間の出處進退の適不適のほうか、天下蒼生の安危といふことよりも大切なのであらうか？ (中略) 身を殺して仁を成すべきことを言ひながら、其の一方、何處かしら明哲保身を最上智と考へる傾向が、時々師の言説の中に感じられる。それがどうも氣になるのだ。(中略) 子路が納得し難げな顔色で立去つたとき、その後姿を見送りながら、孔子が愀然として言つた。邦に道有る時も直きこと矢の如し。道無き時も又矢の如し。あの男も衛の史魚の類だな。恐らく、尋常な死に方はしないであらうと。

(一二、491～492 ページ)

孔子が「尋常な死に方はしないであらう」と予言したように、保身を最上としない子路は、己の信じる道を全うしようとして命を落とす。保身を最上とし

ない子路の考えは、次の二か所の引用にも表れている。

（楚が呉を伐ったとき、楚の王子棄疾が「射よ」と言われてようやく一人を射斃し、ふたたびうながされてまた弓を取り出し、あと二人を斃したが、一人を射るごとに目を掩うた。孔子はこの話に「人を殺す中、また礼あり。」と感心した）

- (9) 子路に言はせれば、併し、こんなとんでもない話はない。殊に、「自分としては三人斃した位で充分だ。」などといふ言葉の中に、彼の大嫌ひな・一身の行動を國家の休戚より上に置く考え方が餘りにハッキリしてゐるので、腹が立つのである。

（一二、492 ページ）

（斉の陳恒がその君を弑した。孔子は哀公の前に出て、義のために斉を伐たんことを請うた。請うこと三度、哀公は聞き入れなかった。孔子はむだと知りつつも一応は言わねばならぬ己の地位だと言うのである。）

- (10) 子路は一寸顔を曇らせた。夫子のした事は、ただ形を完うする爲に過ぎなかつたのか。形さへ履めば、それが實行に移されないでも平氣で済ませる程度の義憤なのか？

（一五、496 ～ 497 ページ）

これらの引用部分に見られるように、次第に子路の死を色濃く感じさせるような記述が増える。一身の行動よりも国家の休戚を重んじ、また形を重視するのでなく実行することを重視する子路が語られるのである。

・瑟を鼓す

さて、本稿の中心部分となるのが次の箇所である。結論に関わる重要な箇所であるため、中略しつつ全体を引用する。

(11)或時、子路が一室で瑟を鼓してゐた。孔子は（中略）言つた。あの瑟の音を聞くがよい。暴厲の氣が自ら漲つてゐるではないか。君子の音は溫柔にして中に居り、生育の氣を養ふものでなければならぬ。（中略）今由の音を聞くに、まことに殺伐激越、南音に非ずして北聲に類するものだ。彈者の荒怠暴恣の心状を之程明らかに映し出したものはない。——（中略）子路は元々自分に楽才の乏しいことを知つている。そして自らそれを耳と手の所爲に歸してゐた。併し、それが實はもつと深い精神の持ち方から來てゐるのだと聞かされた時、彼は愕然として懼れた。大切なのは手の習練ではない。もつと深く考へねばならぬ。彼は一室に閉ぢ籠り、靜思して喰はず、以て骨立するに至つた。数日の後、漸く思い得たと信じて、再び瑟を執つた。さうして、きわめて恐る恐る彈じた。其の音を洩れ聞いた孔子は、今度は別に何も言はなかつた。咎めるやうな顔色も見えない。子貢が子路のところへ行つて其の旨を告げた。師の咎がなかつたと聞いて子路は嬉しげに笑つた。（中略）聡明な子貢はちゃんと知つている。子路の奏でる音が依然として殺伐な北聲に満ちてゐることを。さうして、夫子がそれを咎め給はぬのは、^{あわれ}瘦せ細る迄苦しんで考へ込んだ子路の一本氣を慍まれたために過ぎないことを。

（四、472～473 ページ）

引用（1）から（10）までから読み取れるように、『弟子』の子路は力頼みがちであるが、一本気で、たとえ孔子にも譲れない部分を持っているということが分かる。それは形のみにとどめず実行に移すことであり、孔子はこの点に置いて子路の将来を案じている。この点が端的に表れたのが瑟を鼓すエピソードである。子路の彈ずる音が「北聲」なのはその性質により、「骨立するに至る」のは一本氣であり必ず実行する性格を反映している。しかし骨立するほど思い悩んでも「北聲」から離れられないことは、「孔子に

も譲れない部分」を映す。孔子は思い悩んだ子路に対して、何も言わず、咎めることもしないのである。

ここまで『弟子』における子路像を確認してきた。では『論語』において、子路はどのような人物と読み取れるだろうか。

2. 『論語』の子路

子路についての重要な基本文献は『論語』である。ここでは『論語』に描かれる子路像を明らかにする。以下、（ ）内は『論語』の篇名である。また書き下し文は筆者による。

・子路の欠点について……知ったかぶり、がさつ、人をしのぐ

『論語』では、子路は何度も孔子にたしなめられ、怒られている。子路の欠点は次の各章に見られる。

(12) 子のたまわく、由、女^{なんじ}にこれを知^{おし}ることを誨えんか。これを知るをこれを知ると為し、知らざるを知らざると為せ。これ知るなり。

（為政第二）

(13) 柴や愚、参や魯、師や辟、由^{がん}や嘑。

（先進第十一）

(14) 子路問う、聞くままに斯れ行わんや。子のたまわく、父兄の在すこと有り、これを如何ぞそれ聞くままに斯れ行わんや。冉有問う、聞くままに斯れ行わんや。子のたまわく、聞くままに斯れこれを行え。公西華曰わく、

由や問う、聞くままに斯れ行わんやと。子のたまわく、父兄の在すこと有り。求や問う、聞くままに斯れ行わんやと。子のたまわく、聞くままに斯れこれを行えと。赤や惑う。敢えて問う。子のたまわく、求や退く、故にこれを進む。由や人を兼ね、故にこれを退く。

(先進第十一)

以上の各章から、子路は知らないことを知っているとする傾向があり、またがさつであり、人よりも前に出ようとする傾向にあったことがうかがわれる。これらのイメージは、『弟子』の子路像にも通じている。

・「勇」

また子路は勇に過ぎるという欠点もあった。

(15) 子のたまわく、道行われず、桴に乗りて海に浮かばん。我に従う者は、それ由なるか。子路、これを聞きて喜ぶ。子のたまわく、由や、勇を好むこと我に過ぎたり。材を取る所なからん。

(公治長第五)

(16) 子、顔淵に謂いてのたまわく、これを用いればすなわち行い、これを舍つればすなわち^{かく}蔵る。ただ我と爾^{なんじ}とこれあるかな。子路が曰わく、子、三軍を行わば、すなわち誰とともにせん。子のたまわく、暴虎馮河して死して悔いなき者は、吾ともにせざるなり。必ずや事に臨みて懼れ、謀を好みて成さんものなり。

(述而第七)

- (17) 子路曰わく、君子は勇を尚ぶか。子のたまわく、君子、義を以て上と為す。君子 勇ありて義なければ乱を為す。小人 勇ありて義なければ盗を為す。

（陽貨第十七）

ここに挙げた引用（15）と（16）は子路の勇について述べられている部分である。子路の勇とは「材を取る所」を考えずに「我に従」いて「桴に乗」る、また「暴虎馮河して死して悔いなき」勇である。すなわち正しいと信じることに對しては、事前の準備もないままに死すらもいとわず突き進むのが子路の勇である。このような勇のかたちは、『弟子』の子路像に反映されている。これに對して引用（17）では孔子が子路に求める勇が語られている。すなわち「義」とともにある勇が本当の勇だということのである。

・政治的手段……勇との関連

子路にはもちろんすばらしい面もあった。次に挙げる各章に見られるように、政治的手腕は孔子も認めている。

- (18) 德行には顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓。言語には宰我、子貢。政事には冉有、季路。文学には子游、子夏。

（先進第十一）

- (19) 季康子問う、仲由は政に従わしむべきか。子のたまわく、由や果、政に従うに於いてか何かあらん。

（雍也第六）

- (20) 子のたまわく、片言^{うったえ}以て獄^{きだ}を折むべき者は、それ由なるか。子路、諾^{だく}を宿^{とど}むること無し。

(顔淵第十二)

さきに孔子から批判された勇は、政治的場面に於いては、果斷という長所として發揮されている。ただし、果斷に結果を求めすぎるきらいもあったようだ。

- (21) 子路曰わく、衛の君、子を待ちて政を為さば、子まさに奚^{なに}をか先にせん。

子のたまわく、必ずや名を正さんか。子路曰わく、これ有るかな、子の迂なるや。奚ぞ^{なん}それ正さん。子のたまわく、野なるかな、由や。君子はその知らざるところにおいては、蓋闕如たり。名正しからざればすなわち言順わず、言順わざればすなわち事成らず、事成らざればすなわち礼樂興らず、礼樂興らざればすなわち刑罰中らず、刑罰中らざればすなわち民手足^おを措く所なし。故に君子はこれに名づくれれば必ず言うべきなり。これを言え^おば必ず行^おうべきなり。君子、その言に於いて、苟^{かりそめ}にする所なきのみ。

(子路第十三)

衛の国は君主の座をめぐる争いで乱れていた。これに対して孔子が「名を正す」と言ったことの深奥を考えず「迂なるや」と言った子路は、おそらく即効性のある政策を出すべきだと考えているのであろう。しかし「名を正す」ことがひいては社会の安定をもたらすことだと諭されてしまった。

・まっすぐ、実行力

また子路の美点の一つは、知識を必ず実行することである。

(22)子路、聞くこと有りて、未だこれを行うこと能わざれば、ただ聞くこと有らんことを恐る。

（公冶長第五）

この引用（22）からは、実行を重んじていることを読み取ることができる。きちんと身につけ実行することができないうちは、次のことを聞くことを恐れたというのである。この点は『弟子』にも反映され、「形さへ履めば、それが実行に移されないでも平気で済ませる程度の義憤なのか」という憤りとなって現れている。

・勇に過ぎる、真っ直ぐすぎる子路

ただし『論語』の子路像にも、真っ直ぐすぎるという点が見られる。

(23)子路、成人を問う。子のたまわく、臧武仲の知、公綽の不欲、卞莊子の勇、冉求の芸のごとき、これを文るに礼楽を以てせば、また以て成人と為すべし。のたまわく、今の成人は、なんぞ必ずしも然らん。利を見ては義を思い、危うきを見ては命を授け、久要に平生の言を忘れざる、また以て成人と為すべし。

（憲問第十四）

孔子は子路に対し、勇が身につけているだけでは十分でなく、勇も含めて様々な徳がバランスよく身につき、さらに礼楽制度であやどられている必要があると論ず。しかし下線部で孔子が言及する、必ずしも望ましいわけではない人物像が、子路の考えている「成人」つまり完成した人なのであろう。

また次の章は、主君に殉ずることこそが仁ではないかと言う子路に対して、孔子がそれは違うと論している。

(24)子路曰わく、桓公 公子糾を殺す。召忽これに死し、管仲は死せず。曰わく、未だ仁ならざるか。子のたまわく、桓公、諸侯を九合するに兵車を以てせざるは、管仲の力なり。その仁に如かんや、その仁に如かんや。

(憲問第十四)

主君にいたずらに殉ずることは仁ではない。時世を見極め、主君が仕えるに足るかを見極め、力を尽くすべきところで力を尽くすのが仁である。

この勇に過ぎる、真っ直ぐすぎるという二点が子路に足りないところであり、子路の死とも関わってくる点である。

・瑟を鼓す

さて、『弟子』と『論語』との子路像の違いが表れているのが次の章である。

(25)子のたまわく、由の瑟、奚為れぞ丘の門に於いてせん。門人、子路を敬わず。子のたまわく、由や堂に升れり。未だ室に入らざるなり。

(先進第十一)

『論語』では、楽は修養を完成させるものでもある。詩によって身につけた基本知識を、礼つまり社会の決まりごとに従って運用し、さらに楽を学ぶことで「和」＝自分が身につけた知識やルール・マナーなどのすべてをちょうど良く調和させる力を手に入れる。そうすることで真に「自分の知識」となり、新しい境地が開ける。

引用(25)において、孔子ははじめ子路の演奏について「奚為れぞ丘の門に於いてせん」と言及した。では子路は音楽が技術的に下手であったのだろうか。ここで瑟という楽器について見てみると、瑟とは25本の弦がびっしりと張られた楽器であり、演奏するのは難しいと考えられる。しかし子路の演奏は「由

や堂に升れり。未だ室に入らざるなり」、つまり一定のところまでは進んでおり、あとは深奥に達するのみであると評されていることを考えると、技術的にはほぼ問題がなかったろう。

では子路は「孔子の門下にはふさわしくない」のはなぜか。子路が「室に入るためには何が必要なのであろうか。もちろん楽器の演奏は個人の人格の発露であるため、「未だ室に入らざるなり」という評価はもう一步で仁といえる段階に達していることを言っている。ところで『論語』において、子路についての孔子の評価は「勇に過ぎる」であった。勇に過ぎることは、「ちょうどよく調和」していない。「もう一步だ」と評されたのは、子路の勇に過ぎる性格が演奏に現れていたためである。¹

ここまで『論語』における子路像を見てきた。がさつで無謀、勇に過ぎるが政治を行う場面においては能力を発揮するという子路像は、『弟子』の子路像と共通する。

しかし『弟子』と異なる点もあった。『論語』由之鼓瑟章における子路の演奏への批判は、『弟子』にあるような「南音（生育）」「北声（殺伐）」という対比における判断ではない。ひとえに「和」しているかどうかという評価基準である。

また『論語』の子路像には暴力性、力頼みの部分は見られない。がさつで無謀ではあるが、剣を取り、また力をふるう場面は直接描かれていないのである。中島敦は『弟子』の子路像を作り上げるにあたり、この力頼みの部分を『論語』以外の古典から持ってきた。それが次に取り上げる『孔子家語』である。

¹ 『論語』における子路の瑟演奏に関しては、拙著『論語における孔子の教育思想と楽』（中国書店、2013年）に詳述した。

3. 『孔子家語』の子路

『孔子家語』には『弟子』の材に取られたと見えるエピソードが多くある。以下に例を挙げる。()内は『孔子家語』の篇名。これ以下、書き下し文は筆者による。

(26)子路、孔子に見ゆ。子のたまわく、汝は何をか好樂する。こたえて曰わく、長劍を好む。孔子のたまわく、われこれをこれ問うにあらざるなり。ただ問う、子の能くする所を以てして、これに加うるに學問を以てせば、豈に及ぶべけんや。子路曰わく、學、豈に益あらんや。

(子路初見篇)

(27)子路、孔子に問うて曰わく、請う、古の道を^す積てて由の意を行わん。可ならんか。

(六本篇)

(28)孔子、陳・蔡の間に厄に遭い、糧を絶つこと七日。弟子餒えて病む。孔子絃歌す。子路入りて見えて曰わく、夫子の歌は、礼なるか。孔子応じず、曲終わりてのたまわく、由、来たれ。吾、汝に^う語げん。君子の樂を好むは、驕ること無きがためなり。小人の樂を好むは、懾れること無きがためなり。それ誰の子ぞや、我を知らずして我に従う者は。子路悦び、戚を援りて舞い、三終して出づ。

(困誓篇)

引用(26)は『弟子』の冒頭部分にそのまま用いられている。また(27)、(28)も、『弟子』においてそのまま用いられたエピソードである。

・琴を鼓す 「子路鼓琴」説話

さて、前述したように、『弟子』における楽器演奏の場面は、『論語』における楽器演奏場面と異なっていた。むしろ次に挙げる『孔子家語』の中の楽器演奏場面とほぼ共通しているのである。

(29)子路、琴を鼓す。孔子これを聞き、冉有に謂いてのたまわく、甚だしきかな、由の不才なるや。(中略)それ南は生育の郷、北は殺伐の城なり。故に君子の音は溫柔にして中に居りて、以て生育の気を養う。(中略)由、今や匹夫の徒、曾て先王の制に意なくして、而して亡国の声を習う。豈に能くその六七尺の体を保たんやと。冉有以て子路に告ぐ。子路懼れて自ら悔い、静思して食わず、以て骨立するに至る。夫子のたまわく、過ちて能く改む。それ進まんかと。

(弁楽解篇)

『論語』由之鼓瑟章では子路が仁という儒教の真髄に到達するまであと一歩であるという評価を受けていたのに対して、『孔子家語』子路鼓琴説話では、子路が演奏している曲が「北声」であり、孔子はそれを選択する子路を「匹夫の徒」とけなしている。子路はこれを聞いて悔い、食事もせずに深く考え、がりがりに痩せてしまった。そこで孔子は、過ちを改めることができたのだから進歩があるだろうと許したのである。

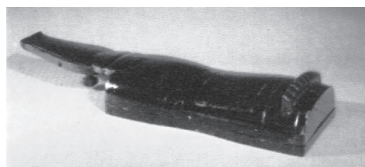
『論語』の由之鼓瑟章ではなく、この『孔子家語』のエピソードが『弟子』にとりいれられたのは、『論語』よりも『孔子家語』のエピソードのほうが「長剣を好む」子路にふさわしいと思われたからであろうか。しかし『孔子家語』のエピソードにない部分が、さらに『弟子』の当該部分に付け加えられているのである。これに関しては次に詳述する。

4. 瑟演奏エピソードから見える『弟子』の中の子路像

ここまで『論語』と『孔子家語』の子路像を見てきた。現在のところ、『弟子』は『孔子家語』の子路像に近そうであるし、瑟演奏部分も『孔子家語』のみとの比較で十分なのかと思われる。しかし、楽器の名称に注目すると、そうでないことが分かる。

・^{きん}琴と瑟

『論語』には琴は出てこず、子路が演奏したのも瑟となっている。一方で『孔子家語』では琴となっていること、また『弟子』ではさらに瑟とされていることから、中島敦は子路が楽器を演奏するエピソードを『論語』『孔子家語』双方から取っていることが分かる。つまり、『孔子家語』と『弟子』の比較をするにあたり『論語』を踏まえなければならないということが明らかになるのである。



参考：曾公乙墓出土 十弦琴²



参考：馬王堆一豪墓出土 二十五弦瑟³

中島敦が踏まえたはずの『論語』由之鼓瑟章では、子路は明らかに「もう少しで室に入れる」と評されている。この場面で子路は「北声」を演奏していたのだろうか。もし北声を演奏していたのであれば、孔子は上記のような評価をしないだろう。聞いたことは必ず実行する子路は、学んだとおり、修養の一つと

² 湖北省博物館編『曾公乙墓』文物出版社、1989年、彩版六ページ

³ 湖南省博物館、筆者撮影

考えて瑟を鼓していたはずだ。それならば、修養の糧となるような曲を演奏していたはずである。そうであるからこそ、孔子は子路の演奏するメロディに乗っていた子路の内面を評したのである。

一方『孔子家語』では、子路の演奏した曲調そのものが「北声」であった。演奏技術や演奏に乗って発露された人格ではなく、曲調について批判しているのである。

中島敦はこの両者を合わせて解釈し、子路の瑟演奏場面を書き上げた。ここで中島敦『弟子』の中の、子路が瑟を演奏する場面をもう一度見てみる。

(30)或時、子路が一室で瑟を鼓してゐた。孔子は（中略）言つた。あの瑟の音を聞くがよい。暴厲の氣が自ら漲つてゐるではないか。君子の音は溫柔にして中に居り、生育の氣を養ふものでなければならぬ。（中略）今由の音を聞くに、まことに殺伐激越、南音に非ずして北聲に類するものだ。彈者の荒怠暴恣の心状を之程明らかに映し出したものはない。——（中略）子路は元々自分に楽才の乏しいことを知つてゐる。そして自らそれを耳と手の所爲に歸してゐた。併し、それが實はもつと深い精神の持ち方から來てゐるのだと聞かされた時、彼は愕然として懼れた。大切なのは手の習練ではない。もつと深く考へねばならぬ。彼は一室に閉ぢ籠り、静思して喰はず、以て骨立するに至つた。数日の後、漸く思い得たと信じて、再び瑟を執つた。さうして、きわめて恐る恐る弾じた。其の音を洩れ聞いた孔子は、今度は別に何も言はなかつた。咎めるやうな顔色も見えない。子貢が子路のところへ行つて其の旨を告げた。師の咎がなかつたと聞いて子路は嬉しげに笑つた。（中略）聡明な子貢はちゃんと知つてゐる。子路の奏でる音が依然として殺伐な北聲に満ちてゐることを。さうして、夫子がそれを咎め給はぬのは、^{あわれ}瘦せ細る迄苦しんで考へ込んだ子路の一本氣を慫ましたために過ぎないことを。

二重下線部分が曲調と人格の発露とを合わせて書いた部分である。子路の人格の発露を「北聲」「荒怠暴恣の心状」と並べて表すことにより、『孔子家語』子路彈琴説話での孔子の強い非難が『論語』由之鼓瑟章における子路の人格発露に至り、その結果子路の性格そのものが「荒々しくてやるべきことをせず、暴力的で自分勝手」であるという表現になったのである。また孔子が子路の内面を厳しくとがめたということが強調された。

そして一重下線部分が、『孔子家語』にも無い、中島敦のオリジナルの部分である。『孔子家語』では、痩せてしまうほど考え込んだ子路を見て孔子が「進歩があるだろう」と言うところで終わるのだが、『弟子』では、子路はまず自分の演奏のまずさは音楽的才能の有無ではなく自分の内面にあるのだと気づく。そしてやせ細るまで考え込んだ子路は、再び恐る恐る瑟を演奏する。残念ながら、子路の内面は変化していなかった。進歩は無かったのである。しかし孔子は、一度は厳しくとがめた子路の内面が変化しなかったにも関わらず、「子路の一本気を^{あわれ}慍」み、何も言わない。

これを子路の側から見れば、孔子から何も言われなかったことによって、孔子からそれでいいのだというメッセージを受け取ったと解釈したのである。だから子路は「嬉しげに笑った」のである。

このほかに、『孔子家語』にも典拠のない部分がある。

・譲れないところ

前述したように、孔子にも譲れない部分が子路の中にはある。結局、これにより子路は命を落とすことになる。『論語』にも子路の欠点は書かれており、これらは改めるべきところとして言及される。しかし『弟子』では、子路の目線で書かれているということもあるが、この部分を「これほどの師にもなお触れることを許さぬ胸中の奥所」「ここばかりは譲れないというぎりぎり結著のところ」と表現することによって、欠点と捉えず、これこそ子路だという点に

書き換えた。つまり孔子の視点からすれば子路は「真髓を理解していない弟子」であるが、子路自身にとっては、衛の内乱における自らの死はまさに自分の信じるもののための死であり、子路にとってはこの死にざまこそが正しい行為であった。だからこそ、最後の言葉「見よ！ 君子は、冠を、正しうして、死ぬものだぞ！」において、自分のことを君子、すなわち理想的な人格者と呼んでいるのである。

・子路の死に接した孔子の行為の意味

子路は自分が良いと信じることを行って亡くなった。これに対して、中島敦は物語を孔子がとった行動で締めくくる。

(31)魯に在つて遙かに衛の政變を聞いた孔子は即座に、「柴（子羔）や、其れ歸らん。由や死なん。」と言つた。果して其の言の如くなつたことを知つた時、老聖人は佇立瞑目すること暫し、やがて潸然として涙下つた。子路の屍が醢にされたと聞くや、家中の鹽漬類を悉く捨てさせ、爾後、醢は一切食膳に上さなかつたといふことである。

（十六、499～500 ページ）

この一連の行為の中で重要なのが、孔子が子路の死に接したとき、何も言わなかったことである。これは二度目の瑟の演奏を耳にした後の行動と一致する。すなわち孔子は、弟子の一本気によつてもたらされた死を「慙まれた」のだと解釈することができる。

しかし孔子は、亡くなった子路を慙れんだけではない。「涙下」り、「家中の鹽漬類を悉く捨てさせ、爾後、醢は一切食膳に上さなかつた」のである。これは大いに感情的な行為である。

孔子に塩漬け類を捨てさせたのは、愛であらう。子路と同じく孔子の在世中

に亡くなった弟子には顔回という人物がいるが、この顔回に向けるものとは異なる愛情を、そもそも孔子は子路に抱いていたと思われる。顔回は『論語』の中で「学を好む」⁴と評価された弟子であるため、顔回が亡くなった際に孔子が慟哭した⁵のは、もちろん故人を失った悲しみもあるだろうが、道を体現できる可能性を秘めた者が亡くなったことへの慟哭もあるだろう。これに対して『弟子』での子路への無言の涙は、子路という一人の人間への愛情が流させた涙であるのではないか。『論語』でも、子路は孔子に多く怒られた弟子であるが、孔子は宰我に対するように突き放す⁶ことは決してなかった。『論語』においても孔子は子路に愛情深い視線を向けていたことが読み取れる。このことを考えると、『弟子』で子路の死に際した孔子は、子路が道を体得しなかったことを悲しんだのではなく、純粹に愛する弟子の死を悲しんだのではなかろうか。中島敦はこの孔子の愛情を、子路の死に対して善悪や是非を論じず、ただ慟れみ、涙を流し塩漬けを捨てるという感情的な行動をとらせることで表現したのだ。

中島敦が、子路が瑟を演奏するエピソードに、孔子の子路に対する無言すなわち「それでいいのだ」というメッセージを付け加えたことにより、瑟のエピソードは子路の生きざまの縮図となった。瑟のエピソードを通して物語を見ると、『論語』にも『孔子家語』にも無い子路像がはっきりとしてくる。すなわち、一本気に師匠である孔子の境地に近づこうとするが、自らの譲れない部分は譲らない、しかもそのことを孔子に許されたと感じている、という子路像で

⁴ 『論語』雍也第六「哀公問う、弟子、孰か学を好むと為す。孔子対えてのたまわく、顔回なる者あり、学を好む。(中略)不幸、短命にして死せり。今や則ち亡し。未だ学を好む者を聞かざるなり。」

⁵ 『論語』先進第十一「顔淵死す。子これを哭して慟す。従者の曰わく、子慟せり。のたまわく、慟すること有るか。夫の人の為めに慟するに非ずして、誰が為にかせん。」

⁶ 『論語』公冶長第五「宰予、昼寝ぬ。子のたまわく、朽木は雕るべからず、糞土の牆は朽るべからず。予に於てか何ぞ誅めん。子の曰わく、始め吾れ人に於けるや、其の言を聴きて其の行を信ず。今吾れ人に於けるや、其の言を聴きて其の行を観る。予に於てか是れを改む。」

ある。そして孔子は瑟の場合は厳しく指導せず「慙れみ」、その死に際しては佇立瞑目して涙を流し、家中の塩漬けを捨てるといった感情的な行動をとった。それほど、孔子に愛されていたという子路像である。

おわりに 天への疑問、憤慨……『牛人』、『盈虚』から『李陵』へ

本稿では、中島敦『弟子』の子路像について、特に瑟を演奏するエピソードに関して『論語』と『孔子家語』との比較を通して中島敦の独創の部分を探し出し、瑟のエピソードが『弟子』全体の中で作り上げた子路像を明らかにした。

瑟を演奏するエピソードは子路の人生の縮図であった。ここから見えてきた子路像は、一本気で大事な部分は孔子にすら最後まで譲らず、しかもそれを許されたと感じているものであった。そして孔子は、子路を愛情でもって慙れむのである。

ところで『弟子』には、引用(6)に関して言及したように、中島敦の短編『牛人』や『盈虚』とも連なるテーマ「天」「天命」がある。しかし『牛人』『盈虚』では「因果応報」として出てきたのに対して、『弟子』では天に対する疑問や不満となって現れる。天への疑問も、『論語』や『孔子家語』には見られない記述である。

『弟子』において、子路がクーデターの現場に駆け付けて戦い、旗色が悪くなったとき、群衆から罵声を浴び、無数の石や棒が投げつけられる。これは子路に対する非情なる天命を象徴しているように思える。

さて、天への疑問となると思い浮かぶのが、司馬遷『史記』伯夷叔齊列伝の「天道は是か非か」であろう。そして司馬遷、天・天命と並べば、中島敦の作品『李陵』が連想される。天が必ず悪行に罰を下すということがテーマの一つであった『牛人』『盈虚』から、天・天命に疑いを持つ『弟子』、そして『李陵』

への流れは、今後把握すべき課題である。

参考文献

- ・中島敦『中島敦全集 第一巻』（筑摩書房、昭和 62 年）
- ・佐々木充『中島敦の文学』（桜風社、昭和 48 年）
- ・李俄憲「中島敦『弟子』とその典拠」（新潟大学大学院現代社会文化研究科『現代社会文化研究』第 15 号、1999 年 9 月）
- ・李俄憲「「一片の冰心を恃む」 —中島敦『弟子』における子路の形成—」（新潟大学大学院現代社会文化研究科『現代社会文化研究』第 16 号、1999 年 12 月）
- ・孫樹林氏『中島敦と中国思想 —その求道意識を軸に一』（桐文社、2011 年）
- ・荒木雪葉『論語における孔子の教育思想と楽』（中国書店、2013 年）